

お金との付き合い方を子どもにどう教えるか——というのは、昔もいまも、親にとってはアタマの痛い問題である。ただし、このアタマの痛さ、昔といまとは微妙に痛みの種類が違っているのではないか。

今年四十三歳の僕が子どもだった頃は、「子どもの前でお金の話をするなんて……」という意識がおとなたちを口ごもらせていたものだった。ところが、いまどきの子どもはの眼前で繰り広げられているのはお金の話だけである。子どもは消費者として、もはや資本主義社会に不可欠の存在となっている。

もちろん、それを一方的に批判するつもりはないし、子どもから強引にお金を遠ざけてしまうのも善し悪しだろう。

ただ、問題は、子どもたちがお金を「お金」として実感しているかどうか——。たとえば、硬貨の百円玉と紙幣の千円札とは明らかにカンロクが違う。硬貨の中でも一円玉と百円玉は重さもサイズも違うし、紙幣だって千円札よりも一万円札のほうが一回りサイズが大きく、色合いやデザインも重厚である。そのリアリティーが、子どもたちにお金の価値を無言で、自然に伝えてくれていた。ところが、パソコンに入力する「1000」と「10000」は「0」



絵・森英二郎

## 「お金」の実感

重松 清

一つの違いしかない。「0」のキーを何度叩くか、だけ。そうなると、お金はただの「数字」になってしまうのだ。

それはおとなだって同じだ。銀行振り込みに口座引き落とし、ネット決済、クレジットカードにICカード……「今日はお金をつかったはずなのに、現金を一度もさわらなかった」ということは決して珍しくはないはずだ。

そんな時代に、いかに子どもたちに「お金は数字じゃないんだぞ」と教えるか。難しいよなあ……と高校生と小学生の娘二人を持つ親として、つい弱気にもなってしまうのだが、お金の「数字」化が進むのは避けられないのなら、せめて「このお金がなぜここにあるか」の物語だけはしっかりと伝えたい。それは働く意味を伝えることにもなるだろう。親の仕事を語ることに、その仕事から得たお金で生活が成り立つんだと語りつづけること、すべてはそこから始まるのではないか。ドラマ『北の国から』の名場面——上京する純クンが泥のついた一万円札を手にして泣きじゃくるシーンほど「お金」と「働くこと」について教えてくれる教材はない、と僕は思っている。そして、我が子がある場面から「親の愛」をも感じ取ってくれたら……うれしいですよ。



しげまつ・きよし●作家。1963年岡山県生まれ。1999年『ナイフ』で坪田譲治文学賞、『エイジ』で山本周五郎賞受賞。2001年『ビタミンF』で直木賞を受賞。